船戸与一『蝦夷地別件』論

——「寛政アイヌの蜂起(メナシ・クナシリの戦い)」を
「ハードボイルド・ミステリ」はどう描くか

Saori SAKAMOTO (坂元さおり : Associate Professor, Fugen Catholic University)

✉ 049296@mail.fju.edu.tw

(台湾) 天主教輔仁大学日本語文学系副教授。日本近現代文学、日本語教育。主著に「船戸与一『満州国演義』試論・一ハードボイルド・ミステリが問い直す「植民帝国としての日本」」(『跨境』VOL.6, 高麗大学校, 2018)、「生島治郎が描く「傷痕」としての「租借地上海」——もう一つの戦後文学」としての「ハードボイルド・ミステリ」(『跨境』VOL.8, 高麗大学校, 2019) など。

A Study on Yoichi Funado's *Ezochi Bekken*

: Exploring How the Armed Uprising of the Ainu People in the Kansei Era of the Edo Period was Described in Hardboiled Fiction

This paper focuses on the significance of Yoichi Funado (1944-2015), a Japanese writer of hardboiled fiction. Mitsuo Oda attached great importance to Oyabu Haruhiko and Jiro Ikushima, writers who were repatriated from Japanese colonies and introduced such fiction to postwar Japan. He questioned whether this genre might or should necessarily awaken “the memory of the Empire of Japan”, and recognized Funado as having taken up the mantle of resolving this problem. This is because Funado had always been a writer who strongly believed that hardboiled fiction was a way “to keenly excavate the faces of imperialism” since his debut novel in the 1970s. In this light, this paper examines his novel *Ezochi Bekken* (1995), which depicts the armed uprising of the Ainu people near the end of the period of early modern Japan, and also its legacy in modern Japan, in this way capturing for the first time this entire historical period. This study also examines how this novel affected Funado's many later works, which centered on the theme of the history and memory of the Empire of Japan.

keywords Yoichi Funado(船戸与一), *Ezochi Bekken*(『蝦夷地別件』), Hardboiled Fiction(ハードボイルド・ミステリー), Uprising of the Ainu People in the Kansei Era of the Edo Period(寛政アイヌの蜂起／メナシ・クナシリの戦い), Japan as a Colonial Empire(植民帝国としての日本)

1 はじめに

「近世日本」を世界史的潮流の中で問い直す歴史研究は1980年代後半から盛んになってきたが¹、ポストコロニアル研究でも例えばテッサ・モリス＝スズキは「徳川の商業植民地主義は後にアジアの他地域で日本がおこなった植民地事業に適用される莫大な経験と思想のモデルを創出」したと指摘し、「アイヌ」との関りなど「北方の過去を学ぶこと」を通して「地理的境界の創造について何かを知りうる」のみならず『日本』の定義について、わたしたちは多くを学ぶ²と「近世」と「近代」を繋ぐ問題提起を行っている。

こうしたスズキの問題提起に先駆けて「ハードボイルド・ミステリ」の形で「近世日本」と「アイヌ」との関り、そしてそれが「近代日本」にどう引き継がれていったか、という問題に迫ったものとして、本稿では船戸与一(1944-2015)の『蝦夷地別件』(1995)をとりあげたい³。

船戸はルポルタージュ作家・豊浦志朗として70年代後半文筆活動に入るが、その後船戸与一の筆名で「第三世界」を舞台とする「ハードボイルド・ミステリ」を多く発表していく。フランツ・ファノン⁴やダシール・ハメット⁵に強く触発され、「優れたハードボイルド小説は帝国主義の断面を切り裂く」⁶と語る船戸の言葉はその作品世界を端的に示す

1 荒野泰典『近世日本と東アジア』(1988)、東京大学出版会や木崎良『漂流民とアジア』(中公新書、1991)、大島明秀『「鎖国」という言説』(ミネルヴァ書店、2009)等。

2 テッサ・モリス＝スズキ・大川正彦訳『辺境から眺める』(みすず書房、2000)、pp.30-38。

3 小田光雄は「解説」(船戸与一『虹の谷の五月』集英社文庫下、2003)の注2(p.473)で挙げたテッサ・モリス＝スズキの議論に引き付けながら船戸の問題意識の先見性を指摘している。

4 フランツ・ファノン『地に呪われた者』(みすず書房、1996、日本語版再版)にあたって翻訳を務めた鈴木道彦は、同書「解説」において1995年「10月24日付けの『朝日新聞』」で「作家の船戸与一氏が、23歳のときにマダガスカル島の電気もない宿で、ランプの光を頼りに、日本から持ち込んだ『地に呪われた者』を読んだ思い出に触れて、この書物のことを『死ぬまで忘れないだろう』と書いていた」(p.332)と紹介し、そうした船戸の問題関心は「エドワード・W・サイードが『文化と帝国主義』や『知識人とは何か』でたびたびファノンにふれた」ことと連動していると指摘している(下線引用者)。なお、船戸はインタビューなどでもファノンへの強い共感と関心をしばしば語っている(『ジャーロ』53、光文社、2015)等。

5 船戸は文筆家としてのデビュー当時、卓越したハメット論を書いているが、「高度工業化社会と植民地を同時に合わせ持つ状況、これがハードボイルド小説の母胎であった。そのような国家はどこか？アメリカ合衆国である」と喝破し、収奪と暴力、血と殺戮に満ちた世界に「謎」(ミステリー)をからめて描き切った(「ハードボイルド・ミステリ」)作家として、ハメットを高く評価している(下線引用者、豊浦志朗(船戸与一)「ハードボイルド試論 序の序—帝国主義下の小説形式について」(大岡昇平編『ミステリーの仕掛け』(社会思想社、1981(1996再録)、p.209)。

6 引用は同注5(p.218)。なお同書で船戸は戦後日本に「ハードボイルド」というジャンルを持ち込んだ作家・大藪春彦や生島治郎が「日本旧植民地」からの「引き揚げ者」である点を指摘し、「ハードボイルド」というジャンルそのものが「戦争」や「植民地の記憶」を否定なく喚起するという問題提起を行っている。船戸の提言の先見性については、小田光雄(1997)『船戸与一と叛史のクロニクル』、青弓社や野崎六助(1997)『復員文学論』、インパクト出版会、小野俊太郎(1999)『〈男らしさ〉の神話』、講談社などで指摘されており、船戸と同様の主張はハードボイルド作家・藤田宜永にも見られる(「藤田宜永氏血の弔旗を書き上げた資料山積みの仕事場」、『NEWSポストセブン』(2015・08・27、http://www.news-postseven.com/archives/20150827_344877.html、2017・05・20閲覧)。

また、戦後日本「ハードボイルド」の第一世代・生島治郎についても、尾崎秀樹は同様の指摘を行っているが、詳しくは拙稿「生島治郎が描く「傷痕」としての「租借地・上海」—「もう一つの戦後文学」としての「ハードボイルド・ミステリ」」(『跨境』VOL.8、高麗大学校、2019)で論じた。

ものでもあるが、「寛政アイヌの蜂起・メナシ・クナシリの戦い」(1789)に材をとった『蝦夷地別件』は船戸が初めて「近世日本」を扱った作品であり、遺作『満州国演義』(全九巻、2007-2015)に至る後期作品群へのターニング・ポイントとなった作品でもある⁷。

そもそも「メナシ・クナシリの戦い」が全国的に注目を浴びたのは1984年、フランスのブザンソン市立博物館でアイヌの長老ら十二人を描いた『夷酋列像』(蠣崎波響作)が発見されたことが大きい。この十二人は戦いの直後、若きアイヌの決起者たちの説得にあたり、三十七名を松前藩側に差し出すことで戦いを終結させた「御味方アイヌ」なのだが、この絵を目にした作家・中村真一郎は中でも「国後の首長・ツキノエ」の「姿勢と表情」が「和人の大名たちのそれを遥かにしのぐ態の威厳に満ち」、「七十歳という年齢」ながら「全身にみなぎる精気は列像中随一」と絶賛している⁸。

しかし1989年「寛政アイヌの蜂起200年」を記念して行われた根室シンポジウム「三十七本のイナウ」⁹では、「アイヌ民族の風俗を描いた近世絵画の中でも」「特に高い人気」の『夷酋列像』は「肖像画として優れていても、松前藩が都合よく『御味方』アイヌとしたツキノエ(中村真一郎が絶賛する国後首長一引用者注)らの本心までが写し取られているとは言えない」¹⁰し、また「一揆の場合、首謀者のみの犠牲にとどまっているのが通例だった」のに対し、「クナシリ、メナシにおいては、決起した三十七人もが即決で処刑されて」¹¹おり、そのうち女性らしき名前も一人含まれていることから、「アイヌは女を含めた総動員体制を強いられ、松前藩から見せしめ的に処刑されたのではないか」¹²といった強い疑問の声が上がっている。

また同シンポジウムでは、この戦いがフランス革命と同年(1789)に起きている点が大きくクローズアップされ、「〈日本の近世〉を世界史や当時のグローバリゼーションの潮流の中でとらえ直すことの必要性」や「内地(同民族)／外地(異民族)」の境界線の作られ方、そして「民族抑圧など今日にかかわる問題として」改めて考え直すことの必要性が唱えられた¹³。

このように二百年の時を経てなお、本戦いを巡って多くの問いが噴出するのは、当時のアイヌ側の資料がほとんど残されていないためでもある。加えて、これまでに新谷行『アイヌ民族抵抗史』¹⁴のように、これを「抵抗の歴史」として現在の問題と繋げなが

7 『満州国演義』については拙稿「船戸与一『満州国演義』試論ハードボイルド・ミステリが問い直す「植民帝国としての日本」」(『跨境』VOL.6, 高麗大学校, 2018)で論じた。

8 中村真一郎『蠣崎波響の生涯』(新潮社, 1989), p.22.

9 同シンポジウムは翌年『三十七本のイナウ』(北海道出版センター, 1990)として出版されている。

10 山口勝次郎「クナシリ・メナシの戦いを考える」(『三十七本のイナウ』, 北海道出版センター, 1990), p.230. また『夷酋列像』の「虚構性」については「彼らが身に纏っている蝦夷錦やロシヤ風の外套、靴などは」「普段着用していたものではない」点も繰り返し指摘されてきた(井上健一郎「『夷酋列像』と現代」(『メナシの世界』北海道出版企画センター, 1996), p.251)。

11 秋葉實「クナシリメナシの戦い二〇〇年を省みる」(『三十七本のイナウ』北海道出版センター, 1990), p.196.

12 同注10, (p.232).これは「道ウタリ協会理事の成田得平さん」の発言を紹介したものである。

13 同注10.

14 新谷行『増補アイヌ民族抵抗史』(三一新書, 1977)初出は1972).

ら位置づけたものもあるが、1986年に当時の首相・中曽根康弘が「日本は単一民族国家」と発言し、関東ウタリ会から強い抗議を受けた例¹⁵や、近年でも小林よしのりが「和人との混血が進み」「国家を形成するポテンシャルを持たない」から「アイヌは民族とはいえない」と発言し、論争となった例¹⁶に見られるように、「アイヌ／和人」をめぐる議論は幾重にも錯綜し、共通認識が今も得られているわけではない。

それに対し船戸は「民族」を規定するのは「血」ではなく「意識」であるという立場から¹⁷、先行する新谷『アイヌ民族抵抗史』やシンポジウム「三十七本のイナウ」での議論、そして多くの近世歴史研究の成果を踏まえつつ¹⁸、新たな角度から「メナシ・クナシリの戦い」を描こうとした。そうやって書かれた『蝦夷地別件』には従来の「記録」—徳川幕府側『蝦夷地一件』や松前藩側『寛政蝦夷乱取調日記』等¹⁹—を組み替える「別件」である、という強烈なメッセージが込められている。本稿では「メナシ・クナシリの戦い」に船戸の「想像力」²⁰がどのように介入するのか、そして「日本近世」と「近代」の接続点を船戸がどのように捉え、それが『満州国演義』等、後期船戸文学のあり方にどう繋がっていくのか考察したい。

2 『寛政蝦夷乱取調日記』(1789)に記された「メナシ・クナシリの戦い」

ではまず、1789年に起きた「メナシ・クナシリの戦い」について、松前藩士・新井田孫三郎による『寛政蝦夷乱取調日記』(1789・6-9)及びそれに付せられた「解題」²¹を引用しながら簡単に説明しておこう。本資料を参照する理由は、鎮撫隊を率いた新井田自らしたための「記録」であり、事件発生の原因について多くの「蝦夷共口書」を集め²²、さらに船戸の『蝦夷地別件』でも「松前藩士・新井田孫三郎」は大幅な脚色を経てメインキャラク

15 中曽根発言後の関東ウタリ会側の対応については萱野茂監修(1995)『アイヌ民族写真・絵画集成』第六巻、日本図書センターに詳しい。

16 小林よしのり『ゴーマニズム宣言NEO2』(2009)、小学館や小林よしのり・香山リカ『アイヌとヘイトスピーチ』(創出版、2015)等。

17 船戸与一・前田哲男「対談最初にして最長の時代小説」(『波』29、新潮社、1995)、p.10。

18 『蝦夷地別件』「参考文献」には新谷の書籍(注14)やシンポジウム『三十七本のイナウ』(注9)の他、多くの近世歴史研究の資料が挙げられている。

19 『蝦夷地一件』は『新北海道史』七(1969)、『寛政蝦夷乱取調日記』は『日本庶民生活資料集成』四(三一書房、1969)に収められている。他に松前町史編集室編『松前町史』(1988)、通説編、松前町にも詳しい説明がある。これらの資料も船戸『蝦夷地別件』の参考資料に挙げられている。

20 「国後日梨の蜂起」について残っているのは「和人側の文献」だけだが、「その時アイヌ社会に何が起きたか」、「作家の想像力はそこに踏み込むべきだと思う」と船戸は語っている。大沢在昌「船戸与一は石もて追われる夢を見る」(『エンバラ』光文社、1996)、pp.11-12。

21 新井田孫三郎『寛政蝦夷乱取調日記』(1789)、『日本庶民生活資料集成』四(三一書房、1969)。なお、『日記』本文の前に「解題」が付されている。

22 『寛政蝦夷乱取調日記』では、これらの「口書」はツキノエなど「ゑとろふ、くなしり、めなし右三カ所」の「長者」十名の報告によると記されており(p.705)、運上屋番人の中でも生き残った伝吉・吉兵衛による調書も見られる。同注21。

ターの一人として登場するからだ。

「解題」(679—680頁)によるなら、「寛政元(一七八九)年五月七日、国後島南端泊付近の蝦夷が突然泊運上屋を襲い」、十三日には根室の目梨に広がり、殺害された和人は「七十一名」、これに対し松前藩は「藩士新井田孫三郎以下二百六十余人を急派してこれを鎮撫せしめ」、「この時既にこの方面で有力な酋長、国後のツキノエ、厚岸のイコトイ、納沙布岬のションコ等が相談して」「暴徒を説得し」、「鎮撫隊の来着を待っていた。新井田等は直ちにこれを尋問し、二百余名の中首謀者八人、和人を殺害した者二十九名の罪状を明らかにし、死罪を宣した。」(傍線引用者)。

ここに出てくる「有力な酋長、国後のツキノエ」こそ、『夷酋列像』で「七十歳という年齢ながら」「全身にみなぎる精気は列像中随一」(中村真一郎)とされた人物なのだが、そのツキノエが投降を説得した「暴徒」の中には、ツキノエの息子・セツハヤフも含まれ、死罪となっている。この処刑に関して『寛政蝦夷乱取調日記』本文では、首謀者「五人迄首を刎、六人目引出に遣候處、牢内騒たち、大勢にてベウタンケ致候」(712頁)—処刑の最中、大勢のアイヌたちから「ベウタンケ」(呪いの絶叫)が起きた—ため、慌てた鎮撫隊は牢の内外に向け発砲を重ね、次々と槍や刀などで「不^レ残打取首刎」(残らず首を刎ねた、712頁)と生々しい記述が見られる。

記述通りのことが起きたとしたら、息子を含む一族の者たちを次々と目の前で惨殺され、松前藩「凱旋」に「討った者の首級」(「解題」680頁)と共に従わされた「国後のツキノエら」の「本心」は、松前藩側が描く『夷酋列像』の肖像画に「写しとられているとはいえない」という声があがるのも肯ける²³。船戸の『蝦夷地別件』ではこうした疑問の声を踏まえて、「ツキノエらの本心」を探ることこそが物語を動かしていくのだが、それに迫るため、物語には大胆な「仮説」が用いられていく。だが、話を急ぐ前に、松前藩側の記録『寛政蝦夷乱取調日記』において、「騒動」の原因がどのように書かれているかも見てみよう。

当嶋におゐて粕^メ稼方相始り候てより同所夷共え粕^メ割合杯と申候手腕の義一向無^レ之、其上少のぶんまも呉不申候て日々数多の夷共を引寄召使候事故、何れも難渋仕り候。猶又当年より夷とも不働いたし候御座候得は、窯に入れ粕とともに縛殺又は米、酒、味噌の類迄毒を入候て長人たちは不^レ及^レ言^レ面立候夷ともを不^レ残毒殺いたし候て、同所へシヤモ人数多入込、所々え致一家造二シヤモ地同様に商売可^レ致旨稼方の者ども申事に候。(略)然處当四月中惣長人サンキチ病氣罷在候節めなし領うゑんべつと申所の支配人勘兵衛と申者(略)持参致呉酒をサンキチ吞候處、其儘相果申候(略)」

(705頁)

引用に見られるように、運上屋が「此嶋」に入ってきてからアイヌたちは厳しい労働

²³ 同注10。

を強いられ、ひどく困窮していたが、「当年」(蜂起の年)になって運上屋の番人の中には「お前たちが働かないなら残らず毒殺し、そこに数多くの和人を送り込んで和人の地同様にするぞ」と脅し、そこに「惣長人」(首長)サンキチが運上屋支配人から送られた酒を飲み、死んでしまった。そのため「サンキチ子供ホシニアイヌ此者共を初として此度騒動を起候事に御座候」(705頁)。『日記』内「口書」にはこの時期、同じく運上屋の食べ物を食べたアイヌたちが相次いで死んだことや、運上屋によるアイヌへの強奪・強姦が頻発したことも記されている。

こうした「口書」が含まれる『寛政蝦夷乱取調日記』だが、本『日記』をはじめとする松前藩側の報告を受けた幕府の老中・松平定信はこれを「信頼できない」と断じたようだ²⁴。というのも松前藩側の報告は事の原因を全て運上屋(飛驒屋)になすりつけ、責任を回避しようとする意図があると判断されたからだ。また、蜂起とロシアとの繋がりに対しても、「赤人等異邦之者入交候儀二者無之」とする松前藩の回答に対し、松平定信は「強い疑いを示した」ようである²⁵。そしてこうした「メナシ・クナシリの戦い」に端を発する「ロシア」への対抗意識こそが、後に「幕府をして蝦夷地直轄に踏み切らせた」と菊池勇夫は論じている²⁶。

船戸がこうした歴史的資料・経緯を踏まえながら『蝦夷地別件』で描くのはまず第一に、当時苛烈な植民地的状況下に置かれた「アイヌ」が戦う(「立つ」)しかない状況に追い込まれていく過程である。そして第二に「ロシア／アイヌ／運上屋／松前藩／幕府」間で連鎖する収奪と暴力の力学に迫りながら、結局「人間(民族、近代的国民国家)とは何か」という大きな「謎」に迫ることなのである。

3 物語を動かす「ロシアの銃三百挺」と「ポーランド貴族・マハウスキ」

『蝦夷地別件』第一章にあたる「波の譜」では蜂起の9か月前(1788年9月)、国後の首長・ツキノエがエトロフで「ポーランド貴族・マハウスキ」と接触する場面が描かれる。マハウスキは小説上の架空の人物だが、史実上もツキノエは1778年と1779年、松前藩との面会を求めたロシア人イワン・オチュレデン他三十三名をノマカップに案内しているため²⁷、ツキノエが北方からの客と会うという本作の設定は、決して不自然なものではない。

物語の設定では、マハウスキはエカテリーナ二世治下のロシアによるポーランド分

²⁴ 松前町史編集室編「幕藩体制の成立・展開と松前」(『松前町史』同注19)による。これは幕府側『蝦夷地一件』などとの比較から導き出された見解だが、『寛政蝦夷乱取調日記』の「蝦夷共口書」及び三十七名の処刑に関しては、松前藩からの指示が新井田孫三郎に届く前に既になされていた点も同書で指摘されている。

²⁵ 同注24。

²⁶ 菊池勇夫「幕府の蝦夷地直轄はアイヌに何をもたらしたか」(『争点日本の歴史』新人物往来社、1991)、p.243。同様の指摘は『松前町史』(同注24)にも見られる。

²⁷ 同注14、pp.118-120。

割に抗い、祖国独立を願ったため、去勢され、オホーツクに流刑中の身である。その頃ツキノエは松前藩(飛騨屋)の圧政から同胞を守る道を考えていたのだが、ロシア船を奪い脱走に成功したマハウスキは、ツキノエに「ロシアの銃三百挺」を融通しようと持ちかける。マハウスキはアイヌ蜂起の後押しをロシア軍にさせ、その隙をついてポーランド独立を画策しようとしたのだ。しかし翌年、マハウスキは仲間からの密告でポチョムキン殺害計画が漏れ再逮捕され、ツキノエは銃を手に入れることができなくなってしまった。

「鉄砲がなければ和人とは戦えん」(上、188頁)というツキノエの命令を息子・セツハヤフとその妻オペルヨフ²⁸は聞き入れず、マキリ(アイヌ伝統の短刀)や弓矢、鎌や鋸だけで蜂起に踏み切る(第三章「火の譜」)。だが内部分裂や蝦夷地幕府直轄を画策する御家人・葛西政信の暗躍など、様々な要因が絡み合い蜂起は失敗、ツキノエは「アイヌが根絶やしされないために」(下、244頁)、息子・息子の妻を含む三十七名を新井田孫三郎率いる松前軍に引き渡す(第五章「霧の譜」)。

以上が第五章までの概略だが、前節で参照した『寛政蝦夷乱取調日記』で「国後の惣長人・サンキチ」の毒殺疑惑に「子供ホシニアイヌ」らが立ちあがったとされているのに対し、船戸の『蝦夷地別件』で物語の中心となるのは、「国後の脇長人・ツキノエ」と「息子・セツハヤフとその妻・オペルヨフ」の対立なのである。そしてこの父子のすれ違いは「ロシアの銃三百挺」によって決定的になる。無論、これは物語上の「仮定」ではあるが、「仮定」の核とも言える「ポーランド貴族・マハウスキ」の人物(経歴)造形に、「手紙事件」で知られるモーリス・ベニョフスキー(ハンペンゴロウ、1746-1786)の影が色濃く見られる点に注目したい。

ベニョフスキーとはポーランド独立を掲げた「バル連盟」(1768—1772)に「身を投じてロシアと戦い」、「ロシア軍に捕らえられた後、脱走を企て、再度捕まり、カムチャッカに流され、再度脱走と反乱を企て」²⁹、1771年に乗取ったロシア船で日本に寄港するが、その際「僭王エカテリーナ二世」の日本侵略を警告する手紙を長崎奉行所に送りつけた人物である。

このベニョフスキーが残した『航海記』と「手紙」には虚実が入り混じり、「当時のロシア人は、日本侵略を企てるどころか、その太平洋沿岸の領土をまとめて維持するだけで精一杯だった」³⁰とする知見から、現在ベニョフスキーは「風変わりな」「いんちき」「冒険男爵」³¹、「世界航海史上もっともわけの分からん人物」³²として揶揄混じりに取り上げら

28 船戸は登場するアイヌの人名も判明している者はなるべく史実上の名前を用いたと語っているが(注20, p.9)、『寛政蝦夷乱取調日記』(同注21, p.712.)に記載のある「女性」らしき処刑者の名前は「おかとれん」で「めなし」出身なので、『蝦夷地別件』に登場するクナシリのセツハヤフの妻・オペルヨフは船戸が名前から作り上げた人物といえる。

29 水口志計夫・水口志計夫・沼田次郎編訳「ベニョフスキーについて」(『ベニョフスキー航海記』, 平凡社, 1970), p.7.

30 ドナルド・キーン・芳賀徹訳「日本人の西洋発見」(『ドナルド・キーン著作集』11, 新潮社, 2014, 初出は1957), p.47.

れるに過ぎない。しかしベニョフスキーの「手紙」は当時、工藤平助『赤蝦夷風説考』(1783)や林子平『海国兵談』(1791)で『北辺の警』を強調する論拠として特筆され³³、「メナシ・クナシリの戦い」直後、松平「定信政権が何より恐れたのは、アイヌ蜂起の背後」で「糸を引いている」「ロシア人」の存在であった³⁴。

さらに、ベニョフスキーの『航海記』や「手紙」が虚実入り乱れるものであっても、それが当時の「世界史的潮流」の記号を強く組み合わせたものとなっている点は見逃されるべきではない。というのは、ベニョフスキーが身を投じた「バル連盟」はロシアのポーランド分割に抗おうとしたが、当時の啓蒙思想をリードしたルソーやマブリー、ルリエールは「バル連盟」に「市民的自由と民族独立」の芽吹きを見、それは「海を越えて」「アメリカの独立」思想にも影響を与えたといわれているからだ³⁵。

それに加えて、前にも触れたように「メナシ・クナシリの戦い」は奇しくもフランス革命と同年(1789)に起きており、船戸は本作執筆時期に「フランス革命」こそ「民族概念」を生み出し、「近代的国民国家」の原型を成立させた出来事であると語っている³⁶。であるならば、『蝦夷地別件』において人物(経歴)造形をベニョフスキーに多くを負ったと推察されるポーランド貴族・マホウスキが、「膨張する帝国ロシア」の圧政に抗い「祖国・ポーランド独立」を夢見、ゆえに多くの殺戮へと駆り立てられていく姿は、啓蒙思想の波に乗り「海を越えて」広がる「市民的自由と民族独立」という「近代国民国家」を形成する理念が必然的にはらむ陰画として描かれているといえるのではないか。

そして「独立」を夢見、それゆえ多くの殺戮へと駆り立てられていくのは、本作の主要登場人物たちに共通している。彼らはいずれも「圧政」の前で存続の危ぶまれる自らの共同体を命がけで守ろうとする。しかし彼らは皆、己の信じる「正義」が仲間内の不信や裏切り、そして内外の凄惨な殺戮を生み出すことに直面させられる。それがより深く描かれるのは、続く第六章「風の譜」においてである。

4 「メナシ・クナシリの戦い」以降の世界

最終章である第六章「風の譜」で描かれるのは、戦いから三年後(1792)の世界である。三年の間に「蝦夷地」に住む「和人」は格段に増え、金銭中心の考えが広まり、アイヌ

³¹ 同注30, p.3.

³² みなもと太郎『風雲児たち』5(リイド社, 2002), p.5. 初出は1979.

³³ 沼田次郎・水口志計夫・沼田次郎編訳「日本におけるベニョフスキー」(『ベニョフスキー航海記』平凡社, 1970), p.237. ちなみに『蝦夷地別件』六章の各扉には『赤蝦夷風説考』や『海国兵談』などの一節が置かれている。

³⁴ 同注26, 菊池, p.243.

³⁵ ステファン・キエニューヴィチ編・加藤一夫・水島孝夫訳『ポーランド史』(恒文社, 1986), pp.331-332. ちなみに『蝦夷地別件』「参考文献」にも『ポーランド史』は載せられている。

³⁶ 船戸与一「国境線上の第四世界」(『現代思想』8, 青土社, 1993), p.113.

の生活も大きく変動していく。ツキノエは松前藩から「クナシリ首長」を命じられるが、それは孤立し「裏切者」(下、495頁)の汚名を引き受けることでもあった。そんな折、脱獄したマハウスキが四年ぶりにツキノエに会いに来る。戦いの無残な顛末をツキノエから聞き、銃三百挺を渡すという「約束を守らなかったせいで(略)アイヌ全体をぶち壊してしまった！」(下、495頁)とマハウスキは声を震わせるのだが、ツキノエは自分も「大きな間違いを犯した」(下、499頁)と呟く。

わしは鉄砲のことしか考えていなかった。しかし戦いはそんなものじゃない。
何があってもびくともしないようなアイヌの仕組みを作る方が鉄砲を手にするよりはるかにだいじなことなんだ。わしはそれを忘れていた……(略)もし鉄砲を手にしていたら戦いは最初のうちはうまく進められただろう。だが、長引いたらどうなる？ かならずアイヌのなかが揉めはじめる。あんたから手に入れた鉄砲でアイヌ同士が殺しあうようになっただろう……(略)いまあんたから鉄砲の持ち込みはロシアの眼をこっちに向けさせるためだったと聞いて……もしかしたらもっと酷いことになったろうという気もする。

(下、499―500頁、傍線引用者)

ここでツキノエの呟く言葉は、鋭い批評性を持つ。物語では蜂起前後、アイヌ全体が大きく揺れる様が描かれるが、蜂起に反対する若きメナシ首長・イコトイ(ツキノエの甥)は母・オッケニと謀って、蜂起に加わりそうな同胞を次々と密殺し(第三章「火の譜」、第四章「夜の譜」、その直後、伯父・ツキノエが息子・セツハヤフらの蜂起を抑えきれなかったことを責め、次のように言う。

確かにアイヌは長年に渡って和人に痛めつけられてきた。(略)しかしな、アイヌにも悪いところはあった。(略)これじゃ和人につけこまれるのはあたりまえだ。(略)わかるか？ アイヌの惣長人が和人の長人みたいに大きな家に住み、同胞たちに命令を守らせるようにすることだ。そうなりや和人もおれたち惣長人を見直すようになる。それで対等な口が利けるんだ。(略)シャクシャインの時代ばかりを懐かしがって何になる？

(中、457頁、傍線引用者)

上の引用のように、イコトイは「和人」と「対等な口」を「利く」ためには、アイヌがまず「和人」のようにならねばならない、そうでなければ「和人につけこまれる」だけだ、と主張する。もしアイヌが120年前の「シャクシャインの戦い」(1669)と同様、伝統の短刀・マキリや弓矢、鎌や鎚だけで「和人」と戦うなら―実際、史実上の「メナシ・クナシリの戦い」で用いられた武器はそれだけだった³⁷―、アイヌは夥しい血を流し、多大な

37 新井田孫三郎『寛政蝦夷乱取調日記』(同注21, 1789, p.711.)には蜂起に用いられた武器の記述がある。

犠牲を払わされるだろう。イコトイとその母・オッケニはそうなる前に、自らの手で蜂起の芽を摘もうとする。

物語でイコトイの言動はツキノエと対照的に描かれ、「すぐに威張りたがるが、ほんとは気が小さく」「虚勢を張る」(中、p.268)人物とされている。だが戦いから三年が経ち、ツキノエは「鉄砲がなければ和人とは戦えん」という自分の考えが結局、イコトイと同一線上にあったと思うようになる。というのは、物語が「仮定」として導入した「ロシアの銃三百挺」が近代的戦闘法や人間関係を伴ってアイヌ社会に入るならば、ツキノエが守りたかった「アイヌの暮し」―「みんなで海や野に出向き獲物を取り、^{【47】}「評定」によって何かを決める」(中、457頁)―は変容を迫られるはずだからである。「鉄砲を手に入れたとしても結局同じようにアイヌはばらばらになったんじゃないだろうか」(下、500頁、傍線引用者)。

また、先ほどのツキノエとの対話でマハウスキはロシア軍が仮にこの戦いに参入していたなら「もっとも多くの血を流すのはアイヌということになったでしょう」(下、500頁)と「祖国」ポーランドの状況と重ねながら語るのだが、これを聞いたツキノエは言葉を失い黙り込む。息子・セツハヤフのように伝統の武器だけで「和人」に立ち向かうなら「根絶やしにされ」、甥・イコトイのように「和人」の残忍さを真似ながら「対等」を目指すなら「アイヌの暮し」は守れず、マハウスキの誘いに乗って「ロシアの銃」を導入すれば逆に「ロシアの食べ物にされ」、より「多くのアイヌの血」が流される。

勿論、何度も繰り返すように「ロシアの銃」は物語上のあくまで「仮定」だが、マハウスキがツキノエに詫びるため1792年に潜り込むのは、エカテリーナ二世の命を受け、大黒屋光太夫を乗せたロシア初の遣日使節団ラスクマンの船と設定されており、史実でも1806年レザノフ率いる第二回遣日使節団との通交交渉決裂後、樺太や幕府警備下のエトロフ島が襲撃されるフヴォストフ襲撃事件(文化露寇事件)が起き、1807年には幕府のロシア船打払令、1811年にはゴロウニン事件など、「北方の境界線」をめぐる熾烈な争いがこの後、松前藩／幕府／ロシアの間で繰り返されていく³⁸。

なお、川上淳は記録に伝わるツキノエの甥・イコトイが「メナシ・クナシリの戦い」後「異常と思える行動」(同胞への強奪、強姦、殺人)を1800年代まで頻繁に繰り返したと指摘しており³⁹、『蝦夷地別件』でもそうした残忍なイコトイ像は踏襲されている。だが本作ではイコトイの残忍さは元々「和人と対等な口を利く」ためのものであり、それは結局「和人」(飛騨屋、後に阿部屋)がアイヌに対して長年行ってきた「異常と思える行動」の陰惨な映し鏡とされている点は見逃されるべきではない。即ち記録に残され、『蝦夷地

³⁸ 平川新は1814年ロシアに対して「我が国の境界をエトロフ島」とする「国境に関する明確な認識を幕府がはじめて示した、画期的な出来事」が起き、それに対するロシアもまた「ウルップ島までが領土であることを世界に宣言し」、これが「幕末の国境交渉の大前提」となった点を指摘している(平川新『開国への道』(小学館、2008)、pp.169-170)。

³⁹ 川上淳(1990)「アイヌ首長層と寛政の蜂起」同注9、p.161.ちなみに川上は資料として『大日本近世資料近藤重蔵蝦夷地関係資料一』などを挙げている。

別件』でも描かれるイコトイの同胞への暴力は、飛騨屋、阿部屋といった運上屋や松前藩、幕府、ロシアの勢力争いの中で、八方ふさがりの状況に置かれた当時のアイヌの姿を象徴的に示すものといえるのではないか。

こうした『蝦夷地別件』の優れた点はまず、従来の「記録」には断片的にしか残されていない「アイヌ」が当時置かれた苦境を「物語」の形で鮮やかに描き出そうとした点にある。もちろん、こうした視点は先行する『アイヌ民族抵抗史』や『三十七本のイナウ』などでも示されてきたわけだが、本作の特に優れた点はそれら先行文献が重点的に描く「ばらばらにされるアイヌ」の姿だけでなく、「アイヌ」を「ばらばらにする側」もまた暴力の連鎖で「ばらばらにされ」、「加害」と「被害」は実は合わせ鏡の一对であるというダイナミズムを「ハードボイルド・ミステリ」の手法で描いている点にある。

その顕著な例は、松前藩士・新井田孫三郎であろう。新井田孫三郎は『寛政蝦夷乱取調日記』の記録者として名を残す人物だが、『蝦夷地別件』の中の新井田孫三郎は、お家騒動に揺れる松前藩を救うため、非情な冷酷さを身につけた人物として造型されている。そして孫三郎一度目の妻も二度目の妻も、夫の冷酷さを憎みながら死ぬ。こうした孫三郎像は『蝦夷地別件』によって創り出されたものだが、物語で描かれる松前藩内の血腥い事件の数々は『松前町史』等実際に見られるものでもある⁴⁰。

そしてこれは幕府の間者・葛西政信も同様である。葛西政信は「隣人(シサム)」のふりをして実はその共同体を骨抜きにする(敢えて蜂起を起こさせ、その後蝦夷地を幕府直轄地にする)ためアイヌの地に入り込み、自らの命をかけて「家」や「幕府」を守ろうとするが、政信の「家」・葛西家は政信が邪魔になった段階で彼を切り捨てる⁴¹。そしてポーランド貴族・マハウスキもまた「祖国・ポーランド」を救おうとして去勢され、同志と信じた仲間には裏切られ、最後にツキノエとの会いでわずかに心を通い合わせるものの、クナシリの地であっけない死を迎える。

『蝦夷地別件』ではこうした「加害／被害」の絶え間ない反転が描かれるのだが、それと同時に、共同体内部で最も弱い立場にあり、普段見下げられていた者が「人間」としての矜持を輝かせる一瞬も多く描かれる。例えば飛騨屋の番人「吉兵衛」という人物が日頃からアイヌに親切であったため、蜂起時に虐殺を逃れた例が『寛政蝦夷乱取調日記』に残されているが⁴²、物語で吉兵衛は「安永七年の飢饉でふたりの娘を売り、その三年後に女房に死なれて郷里を離れた」(中、122頁)人物として登場する。非力ながらアイヌへの

⁴⁰ 注19.有名なものでは門昌庵事件(1678)や相次ぐ松前藩藩主の変死事件など。

⁴¹ 新谷行(注14)は「メナシ・クナシリの戦い」が起こる一日前、「長川仲右衛門」という人物が「日頃アイヌ部族に対して親切だったために、一日早く出帆をすすめられ、命を助けられた」例を紹介しているが、『蝦夷地別件』において「一日早く出帆をすすめられ、命を助けられる」葛西政信は、この人物を一部モデルとしていると推察される。なお当時、青島俊蔵など多くの間者が「蝦夷地」に入り込んでいるが、葛西政信は実在の間者がモデルというよりも、アイヌを和人化し「北辺の警」にあたらせる「蝦夷地幕府直轄論」をキャラクター化した存在であり、同様、物語内でアイヌ蜂起を力でねじ伏せようとする新井田孫三郎も、「幕府による松前藩取りつぶしに抗う動き」をキャラクター化した存在と言えるだろう。

⁴² 同注21, p.699.

労りを忘れない吉兵衛を不憫に思った幕府側間者・葛西政信は、近いうち蜂起が起きるからクナシリから離れるよう吉兵衛に勧める。

だがそれに対し吉兵衛は「見くびらないでくださいよ、お侍さん、わたしはこの国後を終の住み処と決めたんだ。(略)ここはね、ところが安らぐんです。庄屋もいなきや代官もいませんからね。もしそういう和人も目障りだと言って蝦夷たちが殺しに来るなら、殺されたっていい」(中、125頁、傍線引用者)と啖呵を切る。その後蜂起が起き、「隣人(シサム)」である吉兵衛は殺さないと告げるアイヌたちに対し、吉兵衛は「確かに飛騨屋のやりかたは酷すぎた」、「けど、わたしもそういう飛騨屋のおこぼれに与って生きてきた。だから、わたしだけが生き残りたいとは思わないんだよ」(下、358頁、傍線引用者)と静かに語りかけている。

また、架空のキャラクターではあるが⁴³、臨済宗の僧・洗元も同じく、非力ながら己の信念を貫く人物として描かれる。洗元は葛西政信と同じ時期にアイヌの集落に現れ、病に次々と倒れるアイヌに心を痛め、療養所を開き、薬草を煎じ飲ませる。松前藩に差し出されたセツハヤフらが次々と殺され、アイヌの群衆から「絶叫」の聲が上がると、たまらず処刑執行の藩士に取りすがり、逆に目を潰されてしまう。アイヌ内部の抗争に巻き込まれ、心ならずも「仏の道」に背く行為を幾度となく強いられ、後には遠島に流刑の身となる洗元だが、それでもアイヌと共にその苦しみを分かち合おうとする生きざまは、「物語」上の「現在」―六十五年後の黒船来航を迎えた日本―において「どんな高僧よりも燦然」と「輝く存在」(下、p.721)とされている。

このように本作では、圧倒的な暴力を伴う共同体の瓦解を人はどう生きるのか、という普遍的テーマが深く追究されているのだが、ここで福島智による「ハードボイルド小説」に対する提言を参照しておきたい。福島は「盲ろう」という障害を抱えながらバリアフリー教育・研究の第一人者となった人物だが、福島によるなら「ハードボイルド小説」とは「困難な状況にあって人間がどう向き合い、どう生きるかというストーリー」であり、「たとえ弱くても、力がなくても、ただ一人で、その場に立ちつくすこと、立ち続けることの意味」を問い、そして「死者が、生きている者の心の中で、いっそう強く生き続けるのだというメッセージ」を伝えるものだという⁴⁴。その上で福島は自らが抱える「盲ろう」という困難な状況の「生きる支え」となったのは、点字図書で読んだ船戸や大藪春彦、北方謙三らによる「ハードボイルド小説」であったと述べている。

この福島という言葉は『蝦夷地別件』に対して直接寄せられたものではないが、本作のテーマも「加害／被害」の連鎖が果てしなく繰り返される中で、それでも「非力な人間が生きよう」とし、「死者が生きている者の心の中で、いっそう強く生き続ける」様を描く

⁴³ 洗元が虚構の人物であることは船戸も語っているが(同注17)、洗元を彷彿とさせる人物に菅江真澄(1754―1829)がいる。薬草研究に勤しみ、1788年(「メナシ・クナシリ」の戦い)の前年蝦夷地に渡ってからは「蝦夷の人々の言葉と生活を理解しようと努力し」「その生活の中に入っていった」(田中優子「組み入れられる蝦夷」、『日本人は日本をどうみてきたか』笠間書院、2015)、p.46)。

⁴⁴ 福島智『ぼくの命は言葉とともにある』(至知出版社、2015)、pp.168-175。

ことにある。こう考えてみるなら、船戸が目指した「帝国主義の断面を切り裂く」方法としての「ハードボイルド・ミステリ」は、一面においては福島が鋭く読み取ったように、「非力な人間の生きる力」や暴力の連鎖の中で命を落とした「死者たちの記憶」をすくいとりとするものとしても存在しているといえるのではないだろうか。

5 おわりに

まとめに入る前に『蝦夷地別件』最終章「風の譜」についてももう少し述べておきたい。実は「風の譜」の中心をなすのはツキノエの孫・ハルナフリによる復讐劇なのだが、この個所への評価は一般にあまり良くない。ハルナフリ―「史実」には登場しない人物―は知力・胆力共に秀で、ツキノエの後継者として将来を渴望される少年だったが、「隣人(シサム)」と信じ、兄とも慕った葛西政信(幕府間諜)に手酷く裏切られ、松前藩に引き渡された父母や一族の者たちが惨殺されていくのを目にして失神する。「風の譜」が描くのはその三年後の世界で、ハルナフリは森の奥に住まい、動物たちの生き肝を食べ、身長も止まり、幽鬼のような姿となる。そして時が満ちると従者ゴスカルリを従え、飛騨屋やその後を継いだ阿部屋の者たち、新井田孫三郎、葛西政信など「アイヌをばらばらにした」者たちを次々と惨殺していく。

このハルナフリの復讐劇に対し否定的評価が寄せられる理由としてはまず、これが船戸の傑作とも呼び声の高い〈南米三部作〉⁴⁵や『猛き箱舟』(1987)、『砂のクロニクル』(1991)等を強く想起させ、船戸作品内の「パターン化」を感じさせる、というものが挙げられる⁴⁶。そして次に、基本的には「史実」の流れに沿う本作において、第六章「風の譜」の復讐劇はそれとは異質で、とってつけたような印象を与える、という理由も挙げられるだろう⁴⁷。

作家・大沢在昌は船戸へのインタビューの中で、この「風の譜」が書きにくかったのではないかと率直に尋ねているが、船戸はそれを認めつつも、それでもハルナフリによる復讐劇を自分は書かなくてはならなかった、と断じている⁴⁸。では船戸がそれほどまでにこの結末にこだわったのはなぜなのだろう。

「風の譜」において「和人」への復讐を行うハルナフリが用いる武器は、ハルナフリを

⁴⁵ 〈南米三部作〉とは『山猫の夏』(1979)、『神話の果て』(1985)、『伝説なき地』(1988)を指す。

⁴⁶ 例えば香山二三郎は本作に対し「近代日本の胎動をダイナミックにとらえた物語世界の魅力はまさに他の追随を許さない」が、船戸の先行作品と重なる「パターン化」には「既視感」を覚えると述べている(『解説』船戸与一『黄色い蜃気楼』(双葉文庫、1995)、p.607)。また野崎六助も『蝦夷地別件』を95年に発表された「ミステリ・ベスト10」の「一等に推すことに迷いはない」、「時代小説は船戸ロマンにとって新機軸」と前置きした上で、しかし「新展開を受け取ることができたわけではない」と述べている(野崎六助『これがミステリガイドだ』(毎日新聞社、1997)、p.310)。

⁴⁷ 映画監督足立正夫は緊張感をもって読ませる本作前半に比べ「後半はヘタレ」と語っている(田辺英彦「追悼「六・一二」の船戸与一と「六・一九」の豊浦志朗」(『出版人・広告人』出版人、2015)、p.73)。

⁴⁸ 同注20、pp.12-14。

可愛がった葛西政信から与えられた「日本刀」である。葛西政信が「隣人(シサム)」のふりをしてアイヌの集落に入り込んだのは、幕府の思惑—将来的にアイヌを和人化し「北辺の警」にあたらせる—を実行するためだったわけだが、その葛西政信から与えられた「日本刀」でハルナフリが「和人」たちへの復讐を行うのは、一つには伝統の刀・「マキリ」や弓矢、鎌や鎚のみで蜂起し、松前藩側に一人の死傷者も出すことなく処刑された父・セツハヤフらの行為を組み替えるためである。そしてもう一つには「ロシアの銃三百挺がなければ戦えない」という考えから、無抵抗のまま息子・セツハヤフらを差し出した祖父・ツキノエの思考に反逆するためでもある。そして何より、父や母、一族の者たちが無抵抗のまま無残に殺されていったその瞬間に永遠に留まり、幽鬼のような姿で「和人」への復讐を行うハルナフリは「戦い続ける少年(の亡霊)」であり、その「日本刀」が向けられる先は、現在にも続く「アイヌ」の存在自体を否定しようとするある種の言説—「ばらばらになったアイヌ」は「消滅」し「民族として存在しない」—なのではないか。

「メナシ・クナシリの戦い」以前にも、「和人」との間でなされたアイヌの戦いとしては「コシャマインの戦い」(1457)や「シャクシャインの戦い」(1669)などがあるが、これらの蜂起者は後にアイヌ側では「英雄」として伝説化され、戦いも彼らの名を冠したものとなっている。それに対し「メナシ・クナシリの戦い」では、首長(ツキノエ、イコトイ、ションコ)らが蜂起者を松前側に引き渡し、「御味方アイヌ」と呼ばれ、今に至る。だからこそ、船戸は「蜂起者たち」(無言のまま刑死された者たち)の「記憶」を永遠に留め置く存在として「架空の英雄(亡霊)・ハルナフリ」を本作で作り出し、「和人」から手に入れた「日本刀」を自らの「抵抗の武器」に組み替えて戦う存在としたのではないか。「支配者側の論理を組み替えて「抵抗」の武器とする」方法論は、船戸が触発され続けたたフランツ・ファノンとも共通するものといえるが⁴⁹、「刀」に多層的な意味が付与され、「植民／被植民」の「歴史」を暴き出す象徴となるのは、この後の船戸作品『金門島流離譚』(2004)や遺作『満州国演義』でも共通している⁵⁰。

『蝦夷地別件』から『満州国演義』に至る一連の後期船戸作品は、「植民帝国日本」のあり方を時間的・空間的広がりのもと鋭く問うものだが、呉智英は「北海道開拓は、一面で満州国建国と相似形」であったと述べている⁵¹。船戸はその「北海道開拓」の起点を1789年の「メナシ・クナシリの戦い」に置き⁵²、「近世日本」と「近代日本」の接続点、そしてそれが「現代日本」に引き継がれていく「歴史」の側面をこれらの作品を通して探ろうとしたといえるだろう。

そして船戸によってなされたこうした問題提起は、非常に重い意味を持つ。というのは戦後日本の「ミステリ評」においては(アメリカと異なり)「先住民を駆逐・侵略して

⁴⁹ 同注4。

⁵⁰ この点は以前拙稿(注7)で論じた。

⁵¹ 呉智英「安彦良和と戦後思潮」(『ユリイカ』9、青土社、2007)、p.71。

⁵² 同注20、p.7。

作った国家ではない」「日本ではハードボイルドは成立しない」という見方が長く存在しており、こうした見方は戦後長く続く「近代日本観」でもあったからである⁵³。だが、船戸が問題とするのはまさにそうした「近代日本＝先住民を駆逐・侵略して作った国家ではない」というような「植民帝国日本」のあり方を無視・無化するようなものの見方自体であり、だからこそ船戸が初めて「近世日本」を舞台に書いた本作は、血塗られた凄惨な歴史として描かれるのである⁵⁴。

こうした歴史は、この後に書かれる〈東南アジア五部作〉⁵⁵や台湾を舞台とする『金門島流離譚』等の作品群、そして遺作『満州国演義』において更に大きなスケールで描かれていくのだが、これら後期作品群がどのような可能性と批評性を有するかについては、船戸文学全体(豊浦志朗名義のルポルタージュや外浦吾朗名義の漫画原案(『ゴルゴ13』)等も含む)を見据えながら、改めて考えることとしたい。

付記 引用は船戸与一(2012)『蝦夷地別件』上・中・下、小学館文庫、初出は新潮社(1995)。

本稿は「『もう一つの戦後文学』としての『ハードボイルド・ミステリ』—船戸与一が描く『植民帝国』の「記憶」—(昭和文学会・台湾日本語文学会姉妹学会締結記念国際シンポジウム、於東京女子大学・2018・6・19)及び「船戸与一『蝦夷地別件』論—「アイヌ最後の戦い」を「ハードボイルド」はどう描くか—(輔仁大学日本語学科創立50周年台湾日本語文学会創立30周年記念国際シンポジウム、於輔仁大学、2018・12・15)での口頭発表をもとにしており、台湾の107年度科技部計画「船戸与一研究—ハードボイルド・ミステリが問い直す『植民帝国としての日本』—(107-2410-H-030-013-)」の助成を受けている。

参考文献

〈書籍〉

- 新井田孫三郎(1789・1969)『寛政蝦夷乱取調日記』、『日本庶民生活資料集成』四、三一書房、Nida, Magosaburo(1789・1969) *Kansei Ezo no ran torishirabe nikki*, Nippon shomin seikatsu siryou shuusei VOL.4, Tokyo: 31shobou.
- 新谷行(1977(初出は1972))『増補アイヌ民族抵抗史』、三一新書、Aratani, Shin(1972・1977) *Zouho Ainu*

⁵³ 森村誠一は船戸与一との対談で次のように述べている。「昔、大御所の評論家が言ったことだが、「日本という国は銃器の社会じゃないし、開拓期のアメリカのように先住民を駆逐、侵略してつくった国家じゃない」「アメリカと違って、常にいちばん強い体制に保護されている国家であるからハードボイルドは育たない」「日本の作家はハードボイルドを書くべきではない」(船戸与一・森村誠一「対談戦後文学が生んだ異端の巨人」(『問題小説7号蘇る野獣追悼特集・大藪春彦の世界』徳間書店、1996)。

⁵⁴ 歴史学者・藤原辰史は船戸の『蝦夷地別件』を「私の人生を決めた本」と呼び、高く評価している。藤原辰史「蝦夷地別件から逃げられない」(『京都大学静脩特集わたしの人生を決めた本』京都大学、2016), p.3. (<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/wp-content/uploads/2016/11/53302.pdf#search=%27%E8%97%A4%E5%8E%9F%E8%9D%A6%E5%A4%B7%E5%9C%B0%E5%88%A5%E4%BB%B6%27>(2019・06・15閲覧))

⁵⁵ 〈東南アジア五部作〉とは『虹の谷の五月』(2000, フィリピン)、『夢は荒れ地を』(2003, カンボジア)、『降臨の群れ』(2004, インドネシア)、『蝶舞う館』(2005, ベトナム)、『河畔に標なく』(2006, ミャンマー)を指す。「これら五カ国は、いずれも第二次世界大戦終了時までに旧日本人の統治下にはいったことがあるという共通点を持ち、「日本は東南アジア諸国を踏み台にした(あるいはしかけた)国」だが「そうした過去の要因と、現時点での国際的な力関係の結果として東南アジアの現状はある」(杉江松恋「解説」(船戸与一『夢は荒れ地を』, 文春文庫2005), p.821)。

- minzoku teikoushi*. Tokyo : 31shobou.
- 荒野泰典(1988)『近世日本と東アジア』, 東京大学出版会, Arano, Yasunori(1988) *Kinsei Nihon to higashi ajia*. Tokyo : Tokyo daigaku shuppankai.
- 大島明秀(2009)『「鎖国」という言説』, ミネルヴァ書店, Ooshima, Akihide(2009) *Sakoku to iu gensetsu*. Tokyo : mineruva shoten.
- 小田光雄(1997)『船戸与一と叛史のクロニクル』, 青弓社, Oda, Mitsuo(1997) *Funado Yoichi to hanshi no chronicle*. Tokyo : Seikyusha.
- 小野俊太郎(1999)『(男らしさ)の神話』, 東京 : 講談社, Ono, Shuntarou(1999) *Otokorashisa no shinwa*. Tokyo : Koudansha.
- 萱野茂監修(1995)『アイヌ民族写真・絵画集成』第六巻, 日本図書センター, Kayano, Shigeru(1995) *Ainu minzoku shashin kaiga shusei* 6. Tokyo : Nihon tosho center.
- 木崎良(1991)『漂流民とアジア』, 中公新書, Kasaki, Ryo(1991) *Hyouryu-min to ajia*. Tokyo : Chu-ou sinsho.
- 小林よしのり(2009)『ゴーマニズム宣言NEO2』, 小学館 Kobayshi, Yoshinori(2009) *Goumanizum Sengen NEO2*. Tokyo : Shougakukan
- 小林よしのり・香山リカ(2015)『アイヌとヘイトスピーチ』, 創出版, Kobayashi, Yoshinori・Kayama, Rika(2015) *Ainu to hate speech*. Tokyo : Sou shuppan.
- ステファン・キューヴェーヴィチ編・加藤一夫・水島孝夫訳(1986)『ポーランド史』, 恒文社, Stephen Kahnovich・translated by Katou, Kazuo・Mizushima, Takao(1986) *Polish history*. Tokyo : koubunsha.
- テッサ・モリス=スズキ・大川正彦訳(2000)『辺境から眺める』, みすず書房, Tessa Morris-Suzuki・Ookawa, Masahiko(2000) *Henkyo kara nagameru*. Misuzu shobou. Tokyo : Misuzu shobou.
- 中村真一郎(1989)『蠣崎波響の生涯』, 新潮社, Nakamura, Shinichirou(1989) *Kakizaki Hakuou no shougai*. Tokyo : Shinchosha Tokyo : Shinchosha.
- 野崎六助(1997)『復員文学論』, インパクト出版会, Nozaki, Rokusuke(1997) *Hukuin bungakuron impact* shuppakai.
- 野崎六助(1997)『これがミステリガイドだ』, 毎日新聞社, Nozaki Rokusuke(1997) *Korega mystery guide da*. Tokyo : Mainichi shinbunsha.
- 平川新(2008)『開国への道』, 小学館, Hirakawa, Arata(2008) *Kaikoku heno michi*. Tokyo : Shougakukan.
- 福島智(2015)『ぼくの命は言葉とともにある』, 至知出版社, Fukushima, Satoshi(2015) *Boku no inochi ha kotoba to tomoni aru*. Tokyo : jishi shuppan.
- フランツ・ファノン(1996)『地に呪われたる者』, みすず書房, Kaisetsu Frants Fanon(1996) *Chini norowaretaru mono*. Tokyo : Misuzu shobou.
- 松前町史編集室編(1988)『松前町史』通説編, 松前町 Matsumaecho shi henshushitsuhen(1988) *Matsumaecho shi Tuusetsu hen*. Matsumae : Matsumae cho.
- みなもと太郎(2002(初出は1979))『風雲児たち』5, リイド社, Minamoto, Tarou(2002・1979) *Huunji tachi* 5. Tokyo : riido sha.

〈論文〉

- 秋葉實(1990)「クナシリメナシの戦い二〇〇年を省みる」, 『三十七本のイナウ』, 北海道出版センター, Akiba, Minoru(1990) *Kunashiri Menashi no tatakai 200 nen wo kaerimiru. 37 hon no Inau*. Hokkaidou : Hokkaidou shuppan center.
- 井上健一郎(1996)『《夷酋列像》と現代』, 『メナシの世界』, 北海道出版企画センター, Inoue, Kenichirou(1996) *Hyoui retsuzou to gendai. Menashi no sekai*. Hokkaidou : hokkaidou shuppan center.
- 小田光雄(2003)「解説」・船戸与一『虹の谷の五月』, 集英社文庫 下, Oda, Mitsuo(2003) *Kaisetsu. Funado Yoichi Niji no tani no gogatsu*. Shueisha bunko ge.
- 川上淳(1990)「アイヌ首長層と寛政の蜂起」, 『三十七本のイナウ』, 北海道出版センター, Kawakami, Jun(1990)

- Ainu shuchosou to kansei no houki. 37 hon no Inau. Hokkaidou : Hokkaidou shuppan center.
- 香山二三郎(1995)「解説」船戸与一『黄色い蟹気楼』, 双葉文庫. Kayama, Nisaburou(1995) Kaisetsu. Funado Yoichi. *Kiirai shinkirou*. Tokyo : hutaba bunko.
- 菊池勇夫(1991)「幕府の蝦夷地直轄はアイヌに何をもちたか」, 『争点・日本の歴史』, 新人物往来社. Kikuchi, Isao(1991) *Bakuhu no ezoti chokkatsu ha Ainu ni nani wo motarashitaka Souten Nippon no rekishi*. Tokyo : sinjinbutuouraisha.
- 呉智英(2007)「安彦良和と戦後思潮」, 『ユリイカ』9, 青土社. Kure, Tomohide(2007) Yasuhiko Yoshikazu to sengo shicho. *Eureka* 9. Tokyo : Seido sha.
- 杉江松恋(2005)「解説」・船戸与一『夢は荒れ地を』, 文春文庫 Sugie, Matsukoi(2005) Kaisetsu. Funado Yoichi *Yume ha areno wo*. Tokyo : bunshun bunko.
- 鈴木道彦(1996)「解説」・フランツ・ファノン『地に呪われたる者』, みすず書房. Suzuki, Michihiko(1996) Kaisetsu Frantz Fanon *Chini norowaretaru mono* Tokyo : Misuzu shobou.
- 田中優子(2015)「組み入れられる蝦夷」・田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか』, 笠間書院. Tanaka, Yuko(2015) *Kumiirareru Ezo*. Tanaka Yuko hen *Nipponjin ha Nippon wo dou mitekita*. Tokyo : Kasama shoin.
- 田辺英彦(2015)「追悼「六・一二」の船戸与一と「六・一九」の豊浦志朗」, 『出版人・広告人』, 出版人. Tanabe, Hidehiko(2015) *Tsuitou '6.12' no Funado Yoichi to '6.19' no Toyoura Shirou. Shuppanjin Koukokujin*. Tokyo : shuppanjin.
- ドナルド・キーン・芳賀徹訳(2014(初出は1957))「日本人の西洋発見」, 『ドナルド・キーン著作集』11, 新潮社. Donald, Keene(2014・1957) *Nipponjin no seiyou hakken*. Translated by Haga Touru *Donald keene chosakushu 11*. Tokyo : shinchosha.
- 船戸与一・豊浦志朗・大岡昇平編(1996(初出は1981))「ハードボイルド試論 序の序—帝国主義下の小説形式について」, 『ミステリーの仕掛け』, 社会思想社. Funado, Yoichi・Toyouura, Shirou・Oooka, Shohei hen(1996,1981) *Hardboiled shiron jo no jo Teikoku shugi ka no shousetu keisiki nitsuite. mystery no shikake* Tokyo : shakai sisousha.
- 船戸与一・森村誠一(1996)「対談 戦後文学が生んだ異端の巨人」, 『問題小説7号 蘇の野獣 追悼特集・大藪春彦の世界』, 徳間書店. Funado Yoichi, Morimura Seiichi(1996) *Taidan Sengo bungaku ga unda itan no kyojin. Mondai shousetsu 7* Tokyo Tokuma shoten.
- 船戸与一(1993)「国境線上の第四世界」, 『現代思想』8, 青土社. Funado, Yoichi(1993) *Kokkyousenjou no daiyonsekai Gendai shisou 8* Tokyo : seidosha.
- 船戸与一・前田哲男(1995)「対談 最初にして最長の時代小説」, 『波』29, 新潮社. Funado, Yoichi, Maeda, Testsuo(1995) *Taidan saisho ni shite saicho no jidai shousetsu. Nami 29* Tokyo : shinchosha.
- 船戸与一(1996)「船戸与一は石もて追われる夢を見る」大沢在昌『エンバラ』光文社. Funado, Yoichi(1996) *Funado Yoichi ha ishi mote owareru yume wo miru*. Oosawa Arimasa *EnPara*. Tokyo : koubunsha.
- 船戸与一(2015)「ロングインタビュー」, 『ジャーロ』53, 東京 : 光文社. Funado, Yoichi(2015) *long interview*. Jarou Vol. 53, Tokyo : Koubunsha.
- 沼田次郎・水口志計夫・沼田次郎編訳(1970)「日本におけるベニョフスキー」, 『ベニョフスキー航海記』, 平凡社. Numata, Jirou・Numata, Jirou hen(1970) *Nippon ni okeru Benyovsky Mizuguchi Toshio. Benyovsky koukaiki* Tokyo : Heibonsha.
- 水口志計夫・水口志計夫・沼田次郎編訳(1970)「ベニョフスキーについて」, 『ベニョフスキー航海記』, 平凡社. Mizuguchi, Shigeo・Numata, Jirou hen(1970) *Benyovsky nitsuite. Benyovsky koukaiki* Tokyo : Heibonsha.
- 山口勝次郎(1990)「「クナシリ・メナシの戦い」を考える」, 『三十七本のイナウ』, 北海道出版センター. Yamaguchi, Katsujirou(1990) *Kunashiri Menashi no tataikai wo kangaeru*. 37 hon no Inau. Hokkaidou : Hokkaidou shuppan center.

〈インターネット資料〉

(2015・08・27)「藤田宜永氏・血の弔旗を書き上げた資料山積みの仕事場」『NEWSポストセブン』
(http://www.news-postseven.com/archives/20150827_344877.html, 2017・05・20閲覧)

(2015) Fujita Norinaga shi Chi no Chouki wo kakiageta shiryô yamadumi no shigotoba *NEWS Post Seven*

(2016・10・31) 藤原辰史「蝦夷地別件から逃げられない」『京都大学 静脩 特集 わたしの人生を決めた本』京都大学

<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/wp-content/uploads/2016/11/53302.pdf#search=%27%E8%97%A4%E5%8E%9F+%E8%9D%A6%E5%A4%B7%E5%9C%B0%E5%88%A5%E4%BB%B6%27> (2019・06・15閲覧)

(2016) Fujiwara Tatsushi. Ezochi bekken kara nigerarenai. Kyoto University